ゐるのである。

宗教的信仰の上に如何に相違があらうとも、苦難の中にある人類から出る叫びの聲には耳を傾けなければならない宗教上の相違の故に惡感情の存する所に個人的の奉仕に依て多くの善き結果が齎されることもある。愛の奉仕は僻見を打破し靈魂を神に歸せしめる。

我等は他人の悲哀や、困難や、苦惱に與り、また貴賤貧富の別なく、凡ての人と共喜悅を偕にし、憂を分たなければならない。『價なしに受けたれば價なしに與へよ』（マタイ傳一〇ノ八）とイエスは命じ給うた。我等の周圍には試煉の中にありて同情の語と助けの手を要する氣の毒な靈魂がある。同情と援助とを要する寡婦、キリストが神から委托されたものとして受けよと命じ給うた孤兒がある、是等の人々は餘りにも屢々見過されてゐる。彼等はみすぼらしい、粗野な一見凡ゆる點に於て好ましからぬ人々であるかも知れない。併し矢張り神の所有である。價を以て買はれたもので、神の目には我等と同等の價値あるものである。神の大家族の一員であつて、キリスト者は神の支配人として彼等に對して責任を有て居るのである。『われ彼等の靈魂を汝等の手に求むべし』と神は仰せ給ふのである。

罪くらゐ惡虐なものはないが、罪人を憐み之を助けるのは我等の任務である。けれども凡ての罪人に同じ方法を以て接近することは出來ない。世には自分の靈の飢渴を隱蔽する者が多くある。さうした人々は柔和な語や親切に記臆えてゐてやることに依て大なる助けを得るのである。また最大の缺乏の中にありながら、それに氣付かない人々もある。さうした人々は自分の靈魂の恐ろしいほど荒んで居るといふことを自覺しない。更に大多數の人々は全く永遠世界の實在感を失ひ、神の像を失ひ、自分は救はれるべきものであるや否やすら判然と知らない。是等の人々は神をも

人をも信用しない。さうした人々の中の大部分は無我の愛の行爲に依てのみ接近することが出來る。先づ彼等の物質の要求が滿たされなければならない。即ち食物を與へ、身體を潔め、人普みの服裝をさせてやらねばならない。我等の無我の愛の證據を見たときに、彼等はより容易くキリストの愛を信ずることが出來るのである。

世の中には過ちに陷り、さうして之を恥ぢ、その愚さをしみ〴〵と感じて居る人々が多くある。彼等はその過失や誤謬を何時までも凝視めて、終に殆ど絶望のどん底に突き落される。かうした靈魂を疎かにしてはならない。流に逆つて泳ぐ者は彼を押返さうとする水流の全勢と戰はなければならない。斯る人に向かつて、長兄イエスが、沈みかけたペテロに差出された樣に、救ひの手を差伸べよう。そして希望に滿ちた語—確信を促し、愛を覺醒めしむる語を彼に語らう。

心靈の中に病める我らの兄弟は、我らが曾て或る兄弟の愛を要めたと同じやうに我らの愛を要めて居る。彼は曾て己の如く弱かつた人、彼に同情し、彼を助け得る人を要めて居る。我等は自身の弱さを知るといふことが、極度の必要に迫つて居る他の人を助けるのに役立つ筈である。如何なる場合にも苦しんでゐる靈魂に對し、我等自らが神からうけてゐる慰藉を分與することなしに行き過ぎてはならない。

人間の智能、精神、心靈をして劣等なる本然の性情に勝利せしむるものは、キリストの友情、即ち活ける救主との個人的接觸である。漂浪者に向かつて、彼を支持する全能者の手、彼を憐むキリストの裏にある無限の人類愛につきて語らねばならぬ。憐憫を知らず、助を求むる叫に耳を傾けない律法と權力とを信ずるだけでは彼には充分でない。暖かい手を握り、優しみに滿ちた心に信頼することが彼の要むる所である。常に側近く在し給ふ神の臨在と同情深き

愛を以て常に彼を見守り給ふことを彼の心に銘記せしめねばならない。常に罪を悲しむ天父の聖心について、今も尙ほ差し伸ばされてゐる聖手について、『寧ろ我が力にたよりて我とやはらぎを結べ、われとやはらぎを結ぶべし』（イザヤ書二七ノ五）と宣給ふ御聲を聞くやうに彼に考へさせねばならぬ。

此働にたづさはるとき、我らには目に見えないながらも仲間がついて居る。天の使達が傷ついた旅人の世話をせしサマリヤ人と偕に居た如く、同胞への奉仕に於て神の御用を務むる凡ての人の側にも立つてゐる。そればかりでない。キリスト御自身が我らと協力し給ふのである。彼は復舊者で在し給ふが故に、彼の監督の下に働くならば偉大なる結果を見るであらう。

我らが此業に忠實であることは、他人の福祉であるのみならず、我ら自身の永遠の運命を決定するものである。キリストが父と一なる如く、我等をも彼と一ならしめんが爲めに、彼との共勞者たらんと欲する凡ての者を悉く向上せしめんと欲んで居給ふ。彼は我等を利己主義より脫却せしめんために苦難と災禍とに逢はしめ、我等の中に彼の品性の特長たる同情、柔和、愛を發育せしめんと努め給ふ。奉仕の働を受けることは、キリストの學校に入り、神の宮廷に入る資格をつける事になるが、之を拒否する事は、彼の教訓を拒否し、永遠に彼の臨在から離れることになるのである。

『汝もし我が道を歩み、わが職守を守らば我が家を司り我が庭を守ることを得ん、我また此に立る者等の中に往來する路を汝に與ふべし』（ゼカリヤ書三ノ七）と主は宣言し給うた。地上に於て天の實在者と共働を偕にすることに依て我等は天上に於ける彼等の友誼の準備をなしてゐるのである。救を嗣がんとする者のために職を執るべく遣

されたる事へまつる靈』卽ち天の使は地上に於て、『事へらるゝ爲にあらず反て事ふることをなす』（ヘブル書一ノ一四）ために生きたる人々を聽て歡迎するであらう。その時到らば此祝福された友情の中にありて、我等は限りなき喜を以て『隣人とは誰か』との問題に含まれた凡ての意義を學ぶ事ができるであらう。

第二十七章　恩惠の報賞

—マタイ傳一九ノ一六—三〇、二〇ノ一—一六、マルコ傳一〇ノ一七—三一、ルカ傳一八ノ一八—三〇に基く—

神の自由の恩惠の眞理は殆どユダヤ人から忘れられてゐた。ラビ達は神の寵愛は行によつて稼ぎ取るべきものであると敎へてゐた。義しき者の受くべき報賞を彼らは自身の働きに依つて獲得せんことを望んでゐた。從つて彼等の禮拜は慾深い、射利的な精神から行はるゝものであつた。キリストの弟子でさへ全然此精神から脫け切らなかつたので救主は凡ゆる機會を捉へて彼等の誤りを示さんと欲み給うた。丁度葡萄園に働く者の譬話が弟子等に與へらるゝ前に或事件が起り、これが端緒となつて主はこの問題に對する正しき根本精神を示し給ふ事になつたのである。

キリストが路を歩いて居給ふとき、一人の若い司が彼の許に馳せ來り、跪いて恭しく敬禮をして、『善き師よ、われ何をなして永遠の生命を嗣ぐべきか』と問うた。

此司はキリストを神の子と認めず、單に榮譽ある敎師と呼んだ。救主は、『何故我を善しと言ふか、神ひとりの他に善き者なし』と仰せ給うた。如何なる理由を以て汝は我を善き師と言ふか、神こそ獨りの善き方である。若我を善きと云ふならば、神の子、また代表者として我を受くべきである。

『汝もし生命に入らんと思はゞ誡命を守れ』と彼は附け加へ給うた。神の品性は誡命の中に表されてゐる。神との

調和を保つためには、神の誡命の原則が凡ゆる行爲の根源とならなければならないと。

キリストは律法の要求するところを些かも緩くし給はない。誤解することの出來ない判然たる語を以て彼は律法に服從することが永遠の生命の條件であると言明し給うた。卽ちそれは、墮落以前のアダムに要求されたと同じ條件であつた。主は曾てエデンの樂園に於て人間に要望し給うた完全なる服從と汚染なき義とを今も尙ほ人間に期待し給ふ恩惠の契約の下に要めらるゝ要求は、エデンに於て要められたと同じもの、卽ち聖く、正しく、善なる神の律法との一致である。

『誡命を守れ』との聖言に對し此青年は『何れを』と答へた。彼は或の儀式上の律法のことゝ推察したのであつたが、キリストはシナイ山で與へられた律法のことを語つて居給うたのであつた。キリストは十誡後半の數ケ條を擧げ更に之を槪括して『己の如く汝の隣を愛せよ』と仰せ給うた。

若人は躊躇するところなく、『我幼き時より皆これを守れり、なほ何を缺くか』と答へた。律法に對する彼の見解は外面的、皮相的であつた。人間的標準によれば彼は汚染なき品性を保有して居た。大體に於て彼の外面的生活は罪のないものであつたので、彼自身も彼の服從は疵なきものであると信じて居た。而もなほ私に彼の心靈と神との關係が全く正しくないのではないかと恐れて居た。此の疑が、『なほ何を缺くか』との質問を促した。

キリストは之に對し、『汝若し全からんと思はゞ、往きて汝の所有を賣りて貧しき者に施せ、さらば財寶を天に得ん、かつ來りて我に從へ』と仰せ給うた。『この言をきゝて若者、悲しみつゝ去りぬ、大なる資產を有る故なり』とある。

自己を愛する者は律法を犯す者である。イエスは此の事を此若人に示さんと欲み、彼の利己心を顯すべき試驗問題を彼に課し給うた。彼の心中の思所を示し給うた。若人はそれ以上の啓發を受けんと欲しなかつた。彼は心の中に一の偶像を秘藏して居た。●即ち此世が彼の神であつた。彼は誠命を守ると告白したが、併し凡ての律法の精神であり、生命である所の原理を缺いて居た。神と人とに對する眞の愛を有つて居なかつた。此の缺如は神の國に入るの資格を授くる一切の缺如を意味してゐた。自己と此世に對する愛着は、天の原則と調和し得ないものであつた。

此の若人がイエスの許に來たとき、彼の眞實さと眞劍さとは救主の心を動かした。救主は『彼に目をとめ、愛しみて言ひ給ふ』とある。彼は此若人に於て義の宣傳者として彼に奉仕する可能性を認め給うた。既に從へる貧しき漁夫等を受入れ給うたと同じく、此有能・高尚な青年を受入れんとしてゐ給うた。若此若人にして其能力を救靈の事業に獻げたならば、彼はキリストの爲に勤勉且成功ある教役者となつたであらう。

併し彼は先づ弟子入の條件を受入れなければならなかつた。即ち神に全的に獻身しなければならなかつた。ヨハネペテロ、マタイ及び其仲間等が、救主の召命に應じ『一切を棄ておき、起ちて從つた』（ルカ傳五ノ二八）やうに、同じ獻身が此若き司にも要求された。而も此事に於てキリストは自ら獻げ給うた以上の大きな犧牲を要求し給ひはしなかつた。主は『富める者にて在したれど、汝等のために貧しき者となり給へり』（コリント後書八ノ九）とある。若人は唯だキリストの踏み給うた足跡を踏むだけでよいのであつた。

キリストは此若人を見守り、その心を要め給うてゐた。青年を人類への祝福の使者として遣さんと欲し給うてゐたのである。物質の代りにキリストは御自身との仲間たるの特權を提供し給うた。『我に從へ』と彼れは仰せ給うた。

ペテロ、ヤコブ、ヨハネは此特權を歡喜として受け入れてゐるのであつた。若人目身もキリストを感嘆の面持を以て仰ぎ見た。彼の心は、救主へ引き付けられた。併しキリストの自己犧牲の原理を快よく受入れるまでになつてゐなかつた。そこで遂にイエスの面前に於て自分の富を選んだ。彼は永遠の生命を慾したが、併し唯一の生命たる無我の愛を心に受入れる事ができなかつた。悲しむ心を抱いてキリストから離れ去つた。

若人の去つた後、イエスは弟子等に、『富める者の神の國に入るは如何に難い哉』と宣給うた。此の言は弟子達を驚かした。彼等は富める者は天の寵兒であると教へられてゐたので、此世の權力と富とは救主の王國に於て彼等が自ら受けんことを希望して居るところであつた。若し富める者が神の國に入ることが出來ないとすれば、他の人に何の希望があり得よう？

『イエスまた答へて言ひ給ふ。子たちよ、神の國に入るは如何に難いかな、富める者の神の國に入るよりは、駱駝の針の孔を通るかた、反て易し、弟子達甚く驚き』彼等自身にも此の嚴肅なる警告が向けられて居ることをやつと自覺した。救主の言の光は權力と富とに對する彼等の秘かなる心の願が曝露された。そこで彼らは自分の運命に關する懸念から『然らば誰か救はるゝ事を得ん』と叫んだ。

イエス彼らに目を注めて言ひたまふ『人には能はねど、神には然らず、夫れ神は凡ての事をなし得るなり』富める者は富めるからとて天國に入ることは出來ない。富は光の聖徒の嗣業を與へない。何人と雖も神の都城へ入るには唯だキリストの絶對の恩惠に依る外はないのである。

『汝らは己の者にあらざるを知らぬか、汝らは價をもて買はれたる者なり』（コリント前書六ノ一九、二〇）との聖

靈の言は富める者にも貧しき者にも一様に與へられたものである。人は此の言を信ずるならば、其所有物を神より托されしものと見做し、御指命のまゝに、或は失はれた靈の救の爲に、或は苦しめる者、貧しき者の慰安のために用ひるにいたるのである。人間の心は地上の財産に執着してゐるから此は不可能である。財の神への奉仕に束縛せられて居る靈魂は人間の缺乏の叫びに對しては聾者である。併し神には不可能な事はない。キリストの比類なき愛を見るならば、利己的な心は溶けて抑制される。パリサイ人であつたサウロの樣に『曩に我が益たりし事はキリストのために損と思ふに至れり。然り、我はわが主キリスト・イエスを知ることの優れたるために、凡ての物を損なりと思ひ彼のために既に凡の物を損せしが之を塵芥の如く思ふ』（ピリピ書三ノ七、八）と言ふにいたるのである。而してかゝる經驗に入る時、彼等は何物をも自分の物と算へなくなり、自らを以て神の數々の恩惠の支配人とし、神の爲に凡ての人の僕たることを喜ぶにいたるのである。

救主の御言が即坐に心に響いたのはペテロであつた。彼は自身とその兄弟とがキリストの爲に棄てた物に對し滿足を感じた。彼は『視よ、我等一切を棄てゝ汝に從へり』と言つた。彼は今やイエスの若き司に對する『さらば財寶を天に得ん』との條件づきの約束を想ひ起して彼とその兄弟とが其犧牲に對して報賞として何を受くべきかを問うた。

救主の答はガリラヤの漁夫等の心を躍らしめた。それは彼等の最高の理想たる榮譽を示すものであつた。『まことに汝らに告ぐ、世あらたまりて人の子その榮光の座位に坐するとき、我に從へる汝等もまた十二の座位に坐してイスラエルの十二の支派を審かん』、イエスは尙ほ語を續け、『また我がため福音のため、或は家、或は兄弟、あるひは姉妹或は父、或は母、或は子、或は田畑をすつる者は、誰にても今、今の時に百倍を受けぬはなし、卽ち家、兄弟、

姉妹、母、子、田畑を迫害と共に受け、また後の世にては永遠の生命を受けぬはなし』と仰せ給うた。

併し、『されば何を得べきか』とのペテロの質問は、雇人根性、つまりキリストの使者たるに應はしくない精神を表白するものであつた。弟子達はイエスの愛に依て引きつけられて來たのではあつたが、いまだ全くパリサイ主義から脱しきつて居なかつた。未だに働きに相應した報賞を獲得するといふ思想の下に働いて居た。未だに自慢と自惚心が強く、仲間同志でも互に比較しあつて居た。誰かゞ失敗すると他の者等は優越感に耽つたといふ工合であつた。

キリストは弟子等が福音の原理を履違へることを恐れ、神の僕等に對する扱方と彼等がキリストの爲に働く精神の持ち方を説明する例話を語り給うた。

『天國は勞働人を葡萄園に雇ふ爲に、朝早く出たる主人の如し』と彼は語り出で給うた。職を求むる人は市場に於て雇主を待ち、そして雇主は此市場で働人を雇ふのが當時の習慣であつた。此の例話の主人は一日の中何回も働人を雇ひに出て行つたとされてゐる。早朝に雇はれたものは一定の賃銀で働くことに同意した。後から雇はれた者は賃銀は主人の考へに一任した。

『夕になりて葡萄園の主人その家司に言ふ「勞働人を呼びて後の者より始め先の者にまで賃銀をはらへ」、斯くて五時ごろに雇はれしもの來りて、おの〳〵一デナリを受く、先のもの來りて多く受くるならんと思ひしに、之も亦おの〳〵一デナリを受く』

此家司が葡萄園の働人を待遇した方法は神が人類を待遇し給ふ方法を代表するものにして、今日一般に人間同志の間に行はれてゐる方法と異つて居る。此世の事業に於ては報酬は爲し遂げた仕事の量に依て與へられてゐる。勞働

働者も自分の稼いだゞけ仕拂はれるものと期待する。併し、此例話に於てはキリストは此世の王國でなくして天國の原則を說明して居給ふのである。從つて彼は此世の標準に支配され給はない。主は『わが思はなんぢらの思とことなり、わが道はなんぢらの道と異なれり……天の地より高きが如く、わが道はなんぢらの道よりも高く、わが思はなんぢらの思ひよりもたかし』（イザヤ書五五ノ八、九）と宣給ふ。

此例話に於て、初めに雇はれた勞働者等は一定の賃銀で働くことに同意し、そして定めの賃銀だけを受け、それ以上一文も受けなかつた。其後に雇はれた者は、『相當のものを與へん』との主人の約束を信じ、賃銀に關しては何の質問もしないで主人に對する信頼を示した。彼等は主人の正當と公平とに信頼した。そして彼等は其働きの量に依らずたゞ主人の寛容に依て仕拂を受けた。

神は我等が罪ある者を義とし給ふ彼に信頼することを欲み給ふ。神の報賞は我等の功績に據つて與へられず、たゞ神御自身の思召のまゝ『我らの主キリスト・イエスの中に神の定め給ひし御旨により』與へらるゝのである。『我らの行ひし義の業にはよらで唯だその憐憫により……我等を救ひ給うた』（エペソ書三ノ一一、テトス書三ノ五）のである。而して神は信頼する者に對し『我らの凡て求むる所、すべて思ふ所よりも甚く勝れる事をなし』給ふのである

人間の働をして神の前に價値あらしむるものは、其成就した働の量でなく、又其外見上の結果でもなく、之を爲した精神である。夕方の五時頃葡萄畑に來た者等は働く機會を與へられた事に對して感謝して居た。彼等の心は自分等を受入れてくれた人に對する感謝で一杯であつた。それで其日の終りに主人が一日分の賃銀を拂つたとき彼等は大に驚いた。これだけの働をしてゐない事を知つてゐたから、雇主の顏に表された親切な表情は彼等を歡喜に溢れ

救罪を求むるインドの人の苦行

しめた。彼等は主人の親切と、受けたる寛大な報酬とをいつまでも忘れることは出來なかつた。自分の無價値を自覺しながら夕刻になつてから、神の葡萄園に入つた。罪人も是れと同じことである。彼の奉仕の時間は短く、自ら報賞を受くるの價値なき者であることを感じて居る彼はたゞ神が彼を雇入れ給うたことで喜びに溢れて居る。そして謙遜な、信頼の念を以て、キリストの共勞者たるの特權を感謝してゐる。かうした精神を神は嘉納し給ふのである。

報賞問題の如きは萬事神に一任して安んずる事を主は欲み給ふ。キリストが靈に宿り給ふときは、報賞の如きは心の最高位を占むる問題ではなくなる。またそれが我等の奉仕を促す動機でもなくなる。第二義的の意味に於て報酬に關し顧慮すべきであることは眞實である。神は我等が彼の約束の祝福を評價することを欲み給ふ。併し神は我等が報賞に對して熱心であることも、また凡ての義務に對して報酬を受けなければならないと感ずることを欲み給はない我等は報酬を得ることに左程に焦慮すべきでなく、寧ろ正しい事は報酬に拘らず之を爲すべきである。神と同胞人類への愛が我等の動機でなければならない。

此例話は第一回の働への召命を聞いて應じなかつた人々を容赦するものではない。家主は、五時頃市場に往つて雇手のない人々を見たとき、『何ゆゑ終日こゝに空しく立つか』と言つた。これに對する答は『誰も我等を雇はぬ故なり』であつた。午後召された者は一人も早朝市場に居なかつた。彼は召を拒んだのではなかつた。一度拒んで後悔ゆるものは、悔改めて結構であるが、併し愛の最初の召命を拒むことは安全な道ではない。

葡萄園の働き人等が一人々々『一デナリ』を受けたとき、早朝仕事に着いた者等は立腹した。自分等は十二時間も働いたではないか、夕刻涼しくなつてから一時間ばかり働いた者よりも多く拂はるゝのが正當ではないか、と理窟を

言つた。『この後の者どもは僅に一時間はたらきたるに、汝は一日の勞と暑さとを忍びたる我らと均しく、之を遇へり』

『主人こたへて其一人に言ふ、友よ、我汝に不正をなさず、汝は我と一デナリの約束をせしにあらずや、己が物を取りて往け、この後の者に汝とひとしく與ふるは、我が意なり、我が物を我が意のまゝに爲るは可からずや、我よきが故に汝の目あしきか』

『斯くの如く後なる者は先に、先なる者は後になるべし』

此例話の最初から働いた人は、自分の奉仕の長いのを理由に他人の上に優越を要求する人々を代表してゐる。彼等は自己賞讃の精神を以て仕事をし、自制と犧牲の精神を以てしない。彼は終生神に事へると自稱するかも知れない。試練、困苦、患難を忍ぶことに於て眞先であつたかも知れない。それで大な報賞を受くる權利があると考へるのである。彼等はキリストの僕である特權よりも、報賞の事をより多く考へてゐる。彼等は、勞苦と犧牲は他の人々以上の榮譽を受ける資格があると考へる。然るに此の要求が認られないために彼等は侮辱を感じた。若し彼等が愛と信賴の精神を以て仕事に從事したならば、彼等は續いて先頭であつたのであるが、彼等の怒りつぽくて愚痴つぽい性向は非キリスト者的で、彼等の信賴するに足らぬものであることを證明する。それはまた彼等の他を凌がんとの慾望と、神への不信と、兄弟に對する嫉妬、貪慾の念を表明するものである。主の慈悲と寛容とは却つて彼等をして怨言の材料を提供するに過ぎない。斯くして彼等はその心靈と神との間に何の連絡もないといふことを示してゐる。彼等は大勤勞者なる神と協力することの歡喜を知らないものである。

唯自分さへよければといふ狹量な精神ほど神の忌み給ふものはない。神はかうした特質を顯すものと共に働き給ふことは出來ない。かうした人々は聖靈の働に對して無感覺である。

ユダヤ人等は最初に主の葡萄園に召されたので、傲慢で自ら義として居た。彼等は久しい間神に奉仕したから他の人よりも大なる報賞に與る資格があると考へてゐた。從つて異邦人が神の物に對し彼等と同じ特權に與ることを許さるゝといふことを諷示されること位腹立たしい事はなかつた。

キリストは最初に彼に從へと召された弟子達が同じ樣な惡い心持を彼等仲間の間に抱藏すべきでないといふことを警告し給うた。彼は教會の弱點と呪詛とは此自義の精神であるといふことを認め給うた。即ち人間は何かの功績に依て天國に於ける或る地位を獲得することが出來ると考へ、また何か或る種の前貸をすれば、主が來て助けて下さると想像し易い。斯くて自己が重くなり、キリストは輕しめられる。何か少ばかりの前貸をしたものは增長し、自己を他に優ると考へ、他人の阿諛を求め、自分が最も重要視されなければ嫉妬心を起す樣になる。キリストは斯うした危險に陷る事なきやう、弟子達を警め給うたのであつた。

自分の功績を誇ることは見當違ひである。『智慧ある者はその智慧に誇る勿れ、力ある者は其力に誇る勿れ、富者はその富に誇る勿れ、誇る者はこれをもて誇るべし、即ち明哲して我を識る事とわがヱホバにして地に仁惠と公道と公義とを行ふ者なるを知る事是なり、われこれらを悅ぶなりとヱホバいひ給ふ』（ヱレミヤ記九ノ二三、二四）

報賞は働によるものでなく全く恩惠によるものである。これ誰しも誇る者のないためである。『然らば我らの先祖アブラハムは肉につき何を得たりと言はんか、アブラハム若し行爲によりて義とせられたらんには誇るべき所あり

然れど神の前には有ることなし、聖書に何と云へるか、「アブラハム神を信ず、その信仰を義と認られたり」とそれ働く者への報酬は恩惠といはず、負債と認らる。されど働く事なくとも、敬虔ならぬ者を義としたまふ神を信ずる者は、その信仰を義と認らるゝなり』（ロマ書四ノ一―五）それ故に他人に優越を誇つたり、他人に對し怨言いたりする理由はないのである。誰も他人以上の特權を與へられてゐる譯でなく、報賞を權利として要求し得る譯のものでない。

最初の者も後のものも共に大なる永遠の報賞に與るべきであつて、最初の者は最後の者を喜んで迎ふべきである。他人に對する報賞につき怨言くものは、彼自身が唯だ恩惠のみに依て救はれたことを忘れて居る。この働人の例話は凡ゆる嫉妬と猜疑とを譴責するものである。愛は眞理を悅び、何等の嫉みがましい比較を試みない。愛ある者は唯だキリストの美はしさと自分の不完全な品性とを比較するだけである。

此の例話は凡の働人に對する警告であつて、たとひ其奉仕の期間が如何に長く、其勤勞は如何に多くとも、兄弟に對する愛がなく、神の前に謙遜がなければ、彼等は取るに足らないものなる事を戒めたものである。自己崇拜には何の宗教もない。自己の榮光をとるに汲々たる者は、キリストへの奉仕に適せしむる唯一の恩惠に缺乏して居る自己を發見せしめるであらう。傲慢と自己陶醉とに耽るときは働は必ず損はれる。

我等の働を神に嘉納せらるゝものとするのは、働の時間の長さではなく、たゞ働を喜んですることゝ、その働に忠實であることである。奉仕に於ては全的に自己を滅却することが要求せられる。眞心から、自己を忘れてなされた最小の義務は、利己心に汚された最大の事業よりも神に悅ばれるものである。神は我等が如何程キリストの精

神を心に抱藏して居るか、如何程キリストの聖像を仕事に顯示してゐるかを見給ふ。彼は我等の働の量よりも我等の働に對する愛と忠實さとを一層尊重し給ふのである。

自己が全く滅却してゐる時、爭覇心が全く除かれてゐる時、感謝が心に滿ち、愛が生活に漲る時、その時こそキリストが我等の心に宿り、而して我等は神と偕に働く者と認められるのである。

其仕事は如何に困難であつても、眞の働人は之を以て重荷と思はない。彼等は辛勞辛苦を厭はなくなる。むしろそれは悉く嬉しい心を以て爲される愉快な働である。神に在るの悅は、イエス・キリストに依て表されてゐる。眞の働人の悅は、キリストの前に示された、卽ち『われを遣し給へる者の御意を行ひ、その御業をなし遂ぐるは是わが食物なり』（ヨハネ傳四ノ三四）との悅である。彼等は榮光の主と協力するものである。此の自覺は、凡ゆる勞苦を和げ、意志を强め、如何なることが起らうとも精神を鼓舞する。キリストの苦しみに與り、其同情に與り、その御事業に於て彼と協力することに依て高潔にされた無我の心を以て働く人々は彼の悅の潮を漲らせ、彼の高貴なる御名に榮光と讃美とを齎すのである。

これが神の爲の眞の奉仕の精神である。此の精神の缺如の爲に、先と思はれた多くの人々は後になり、此の精神を有つ者は後と思はれても先となるのである。

世には自己をキリストに獻げはしたが、未だ主の爲に、何ら大きな働きも、大なる犧牲も爲すべき機會を得ない者が多くあるが、斯る人々は、最も神に嘉納せらるゝには、必ずしも殉教者的自己犧牲を要するものでない事を思ひ自ら安んじて可なりである。天の記錄の書に於て最高位を占むるものは、毎日危險と死に直面した宣教師であるとは限

らない。其私生活に於て、日毎の自己犠牲に於て、心意の純潔と眞實さとに於て、如何なる不快な事に遭遇しても常に柔和なることに於て、キリスト者たる者、卽ち家庭生活の中にキリストを代表する者、斯る人が神の前には世界的に有名な宣教師や殉教者以上に尊ばれないとは限らない。

品性を評價する上に於て、神と人とでは何たる相違のあることであらう。世人も、否その近親・知己ですら絶えて知らざる數々の誘惑―家庭に於ける誘惑、或は心中に於ける誘惑を拒絶せる事實を神はみそなはし給ふ。己の弱さを知りて自らを卑くせること、一の惡しき想ひにすら誠實なる悔改めを爲すことに注意し給ふ。同じく聖事業のために心からなる奉仕をなせることに彼は注意し給ふ。斯る一切を神はみそなはし、天使達も亦之を知るのである。これらのことがエホバを畏るゝ者およびその聖名を憶ゆる者のために神の聖前にある記念の書に書き錄さるゝのである。

學識があるから、或は地位・才能・力量・所謂意志力があるから、それでもつて成功が齎されるものではない。己の無力を感じつゝ、想と能力の源に在すキリストを眺め、眞心より服從して事に當るものが勝利に進むのである。

働きの時間が如何程短くとも、又如何に卑しい働きに當つてゐても、一筋の信仰を以てキリストの御跡に從ふならば、報賞を受けずして失望に終ることはない。所謂智者或は偉人にして得る能はざるものを、却つて卑賤な者或は弱者が獲得する事もあり得る。己を高くする者に對して天の黃金の門は開かれない。其門は傲慢なる心の持主のために擧がる事はない。永遠の戸は、幼兒が懼れ慄きつゝ觸れる時に廣く開かれる。一筋の信仰と愛とを以て神のために働いた者の受くる恩寵の報賞は實に福なるものである。

第二十八章　十人の處女

―マタイ傳二五ノ一――一三に基く―

キリストは弟子達と共に橄欖山に坐してゐ給うた。夕陽は山の彼方に沈み、夕闇の帳があたりを閉じこめた。麓の方を見下すと一軒の家では何か宴會でもあるのか、燈火が煌々と點されてゐた。窓々から流れ出づる燈明と附近に待ち望む人の群は間もなく婚禮の行列の出て來るのを暗示してゐた。

東邦の諸國では婚禮は夜間行はれ、新郎が新婦を迎へに行き、己が家に伴ひ歸るのが習慣である。婚禮の一團は松明を點して花嫁の實家より出で新郎の家に往くのである。新郎の家には披露の宴が張られ、許多の賓客が招待される今しもキリストが眺め給うた場面もまさしくそれであつた。一團のものは花嫁の行列の出て來るのを今か〳〵と待ち設けてゐた。彼等もこの行列に加はらうとしてゐるのであつた。

新郎の家の近くには白衣を纏うた十人の處女がゐた。何れも火の點いた燈と小さな油の器とを携へて、今か〳〵と新郎の出で來るのを待つてゐた。然し、一向それらしい姿が見えなかつた。

幾時間が經過して行つた。待設けてゐた彼女達も遂に退屈し、果は睡つてしまつた。然るに夜半になつて『新郎きたりぬ出で迎へよ』との叫びが聞えた。女達は急ぎ起き上つた。道は松明でもつて明々と照され賑々しき樂音につれ

て行列が近づいて來た。新郎の聲も新婦の聲も手にとるやうに聞えて來た。大急ぎで十人の處女は燈火を手許によせ之を整へ、迎へに出た。然るに五人のものは油壺に油を充たして置くことを忘れてゐた。彼等は斯樣に遲れるとは考へなかつたので、萬一の場合の用意を忘れてゐたのであつた。そこで當惑した彼女達は慧い五人の娘達に『なんぢらの油を分け與へよ、我らの燈火きゆるなり』（英改譯參照）と哀願した。然し乍ら慧き五人のものは燈火を整へると共に油壺を空にしてしまつてゐたので、餘分の油とてはなく『恐らくは我らと汝らとに足るまじ、寧ろ賣るものに往きて己が爲に買へ』と之に答へた。

止むなく彼女達が買ひに行つてゐる間に、行列は通り過ぎて彼女達を後にしてしまつた。然るに慧き五人のものは燈火を點して行列に加はり新郎の家に這入つた。そして門は閉ぢられた。愚なる五人の處女等が婚宴の席に到着した時には思ひがけなく入場を拒絶せられた。彼等は婚宴の主から『われ汝らを知らず』と言はれた。彼女達は暗い戸外に佇んでゐなくてはならなかつた。新郎を待つてゐる一團のものを眺めながら、キリストは斯うした十人の處女の物語を語り給うたのである。そしてこの十人の處女の經驗はまたキリスト再臨直前の教會の經驗に當嵌るのである。

新郎を迎へに出た二種類のものは、キリストの再臨を待望すると稱する二種類の人々を表示する。彼女達は純信仰を揚言する故に處女と稱ばれる。燈は神の言である。これに就て詩篇の筆者は『なんぢの聖言はわが足の燈火、わが路のひかりなり』（シヘン一一九ノ一〇五）と謳つてゐる。油とは聖靈を象徴する。

ゼカリヤの豫言書に聖靈のことが次の如く表示されてゐる。『我に語へる天の使また來りて我を呼び醒ませり、我は睡れる人の呼び醒まされしごとくなりき、彼我にむかひて汝何を見るやと言ひければ、我いへり、我視るに惣金の

燈臺一箇ありてその頂きに油を容るゝ器あり、また燈臺の上に七箇の燈盞あり、其燈盞は燈臺の頂きにありて、之に各七本づつの管あり、又燈臺の側に橄欖の樹二本ありて、一は油を容る器の右にあり一はその左にあり、我答へて我と語ふ天の使に問ひ言ひけるは、我が主よ、是等は何ぞやと……彼また答へて我に言ひけるは、ゼルバベルにヱホバの告げ給ふ言は是の如し、萬軍のヱホバのたまふ、是は權勢に由らず能力に由らず、我が靈に由るなり……重ねてまた彼に問うて此二本の金の管によりて金の油をその中より斟ぎ出す二枝の橄欖は何ぞやと言ひしに……彼言へらく是等は油の二箇の子にして全地の主の前に立つものなり』（ゼカリヤ書四ノ一——一四）と。

二本の橄欖の樹より、二本の金の管によつて、黃金の油が燈臺の燈盞に注ぎ入れられ、黃金の燈臺が聖所を明るくした如く、神の聖前に立つ聖き者より出づる聖靈は、御用の爲に獻身せる人間てふ器に注がるゝのである。即ちこれらの油の二箇の子は、聖言をして足の燈火、路の光ならしむる天與の恩惠を神民に與ふる役目を果すところのものである。即ち『是は權威に由らず、能力に由らず、我靈に由る』（ゼカリヤ書四ノ六）と錄さるゝところのものである。

譬によると十人の處女は新郎を迎へに出たのである。何れも燈火と油の器とを有つてゐた。はじめの程は格別相違のある樣にも見えなかつた。キリスト再臨直前の教會に於ても同じである。何れも聖書知識を有し、キリスト再臨切迫の使命を受け、其の出現を眞面目に期待してゐる。然るに譬にある通りのことが又今日見られる。即ち待つ間が餘りに長びいて其の信仰が試みられる。そして『やよ、新郎なるぞ、出で迎へよ』との叫びが聞える時には不用意のものが多い。彼等は燈火と共に油の器を充たして置くことを忘れる。即ち聖靈に缺くる狀態である。

聖靈なくしては、いくら聖言に對する知識が有つても効果がない。眞理を理論的に理解しても、聖靈が伴はないならば心靈を活かすこともできなければ心を潔むることもできない。いくら聖書の約束と誡命とに通曉してゐても、聖靈が眞理を心の奥に印し給はなければ、人格上の變化を見ることができない。聖靈によつて眼が開かれなければ、眞理と誤謬とを區別することができず、從つてサタンの巧なる奸策に陷らざるを得ぬのである。

愚なる處女によつて代表せられたる人々は所謂僞善者ではない。彼等は眞理を認め、眞理を信ずる者に惹きつけらるゝ輩である。たゞ聖靈の御働に對して其の身を委ぬることをしないのである。彼等はイエス・キリストてふ岩に落つることをせず、舊き性癖に固執するものである。この種類の人々はかの礫地に落ちた種に屬する人々である。彼等は喜んで聖言に耳を傾けるが、それの主義と原則とに同化することをしない。聖靈によつて一向に感化さるゝところが無いのである。ひとたび聖靈が心中に働くとき、而も嘗の彼が之を希求し同意するとき、彼の中に新なる品性を扶植するものである。愚なる處女によつて表示せられてゐる部類のものは、單に表面的な皮相な動作だけで滿足する輩である。彼等は神を知らず、その品性を學ぶことをせず、勿論神との交りを續くるものではない。故に如何に神に賴り、如何に之を仰ぎ生くべきかを體驗しない。彼等の神に對する奉仕は形式に墮したものである。『彼らの民の集會の如くに汝に來り、吾民のごとくに汝の前に坐して汝の言を聞かん、然れども之を行はじ、彼らは口に悅ばしきことをなし、其心は利にしたがふなり』（エゼキエル書三三ノ三一）と。使徒パウロも之こそキリスト再臨直前に生存せるものゝ特性であると指彈してゐる。『末の世に苦しき時來らん……人々己を愛する者……神よりも快樂を愛する者敬虔の貌をとりて、その德を捨つる者とならん』（テモテ後書三ノ一―五）と。

彼等こそ危難の時に平和無事なりと叫ぶ輩である。安逸墮眠を貪り危險を想はざるものである。然し乍ら一朝昏睡狀態より驚き覺醒するや自己の缺乏を認め、他のものに之が補ひを求める。しかし、靈的事物に於ては何人も他のものゝ缺を補ふことはできない。神の恩惠は惜しみなく凡てのものに提供せられ『渴くものはきたれ、望むものは價なくして生命の水を受けよ』（モクシロク二二ノ一七）との福音の宣べ傳へらるゝことは勿論であるが、それにしても品性と云ふものは讓渡したり授受したりし得るものではない。誰も他の代りに信仰することも聖靈を受くることもできないのである。聖靈の結ぶ果なる品性を他に分與することはできない。『ノア、ダニエル、ヨブ（其の他）そこにをるも、その子女を救ふことを得ず、只その義によりて己の生命を救ふことを得るのみ』（エゼキエル書一四ノ二〇）

人の品性は何時の場合に於ても危機に際して明らかにせらるゝものである。『やよ、新郎なるぞ、出で迎へよ』との聲高く叫ばれる時、處女達は假睡より目を醒ますが、其の時こそ果して誰が準備してゐたかゞ解るのである。勿論兩者とも其の不意に乘ぜられたが、一方は危急の場合に於ける手筈が出來て居り、他の方は準備ができてゐなかつた今日でも同じである。何か突然に豫期せざる災禍或は死などに直面する場合、果して彼が神の約束に對し眞實の信仰を有してゐるか否かゞ判明する。又その心が恩惠によつて保たれてゐるか否かゞ解るのである。最後の大なる試練が恩惠の時、卽ち人が神に歸り得る期間の終りに臨むとき、今更心靈の缺陷の補ひはできないのである。

十人の處女は地上歷史の終末に際して警戒に當るところのものである。何れも基督者であると揚言し、何れも招待を受け、名と燈火とを有し、神の御用に當るものであることを自任し、キリストの出現を待つものである。しかもそ

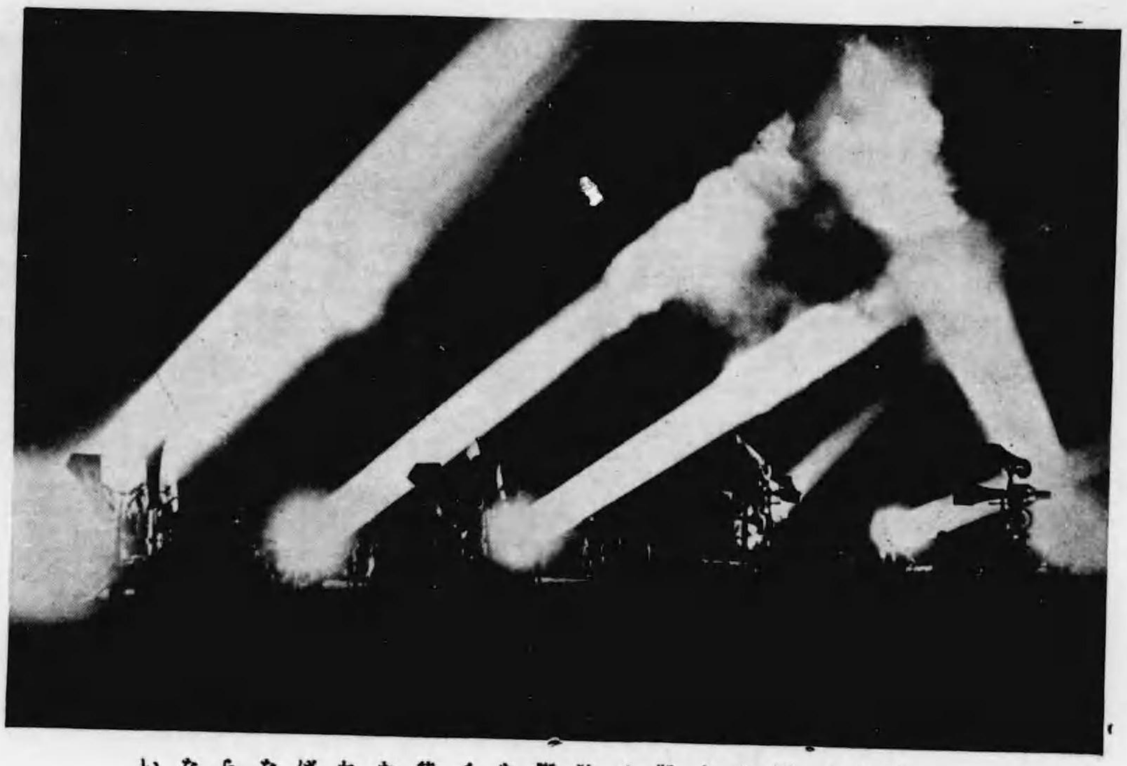
の中の五人は、不用意でゐて、いざと云ふとき變變の場所には這入れず狼狽する類である。

最後の日に、多くのものは聖國に入れられんことを要求して云ふ『われらは御前にて飲食し、なんぢは我らの町の大路にて教へを給へり』『主よ主よ、我らは汝の名によりて豫言し、汝の名によりて惡鬼を逐ひいだし、汝の名によりて多くの能力ある業を爲しゝにあらずや』（ルカ傳一三ノ二六、二七）と。然し『われ汝らが何處の者なるかを知らず惡をなすものどもよ、皆われを離れ去れ』（マタイ傳七ノ二三）とは以上に對する答である。彼等は現世生涯に於てキリストとの交りにはいつてゐないから、隨つて天の言葉も知らず、その獄びに對しても共鳴する事がないのである。『それ人のことは己が中にある靈のほかに誰か知る人あらん、斯の如く神のことは神の御靈のほかに知る者なし』（コリント前書二ノ一一）と。

己の運命を宣告する言葉――『我汝を知らず』程、人間の耳に悲しく響くものは他にあるまい。汝が蔑視せし御靈の交りこそ、汝をして樂しき婚宴の群れに加はらしめ得るものであつたのである。然しもう汝は其の場に與ることができない。其の光も盲なる眼には何ら意味を爲さず、それの美妙なる調べも聾せる耳には何ら樂しきものではない。俗念に癒着せる心には、斯る悅びも愛も獄の喜を起こさない。汝が斯うした天より閉め出さるゝのも自業自得である。

『やよ新郎なるぞ、出で迎へよ』との叫びに接した時、飛び起き、油盡きた燈火をかきたてゝ驚いだところで間に合はない。地上に於てキリスト拔きの生涯を送つてゐながら、それでゐて天國でもつて彼の伴侶とならうとしたところでそれは不可能である。

曙に於て慧き處女達は、燈火と共に器に油を滿たしてゐた。彼の愚なる女達が警戒に當つてゐた夜、燈火は燃々として邊



救主の再臨も斯く油斷なく待たねばならない

を照し、新郎を祝ふ飾光（イルミネーション）を一層明るくした。それは暗を照し、婚筵の場所、新郎の家路を一層明るくするものであつた。

キリストを信ずるものも世の暗路を照さねばならない。聖靈によつて、聖言は之を信受するもの〻生活を一變する更新力となる。心中に聖言の主義・原則を扶植するとき、聖靈は人の裏に神の性質を發現せしむる。そのとき彼の榮光の輝きである品性は、主を信ずるものを通して照り出づる。卽ち斯の如くして彼等は、神を崇め、神の都――羔の婚筵の席に到るべき新郎の家路を照り輝かすのである。

新郎が來たのは深夜――最暗黑の時であつた。同樣キリストの現れ給ふのも、地上歷史の最も暗黑なる時代に實現する。ノア及びロトの時代の狀態は、人の子の來る直前に於ける世界の狀況を最もよく描寫してゐる。聖書はこの時のことを指摘してサタンがその全力を傾注して『不義のもろ〳〵の誑惑』（テサロニケ後書二ノ九、一〇）を悉にすると言つてゐる。彼が活躍してゐる事は、終末時代に起るべき甚だしき暗黑、樣々の誤謬、異端、誑惑が激增してゆくに徵して明かである。又單にサタンは、世人を己が擄にせんとして之を翻弄してゐるだけでなく、彼の誑惑は所謂キリスト教會にまで侵潤してゐるのである。一大背敎は、向後益々甚だしき暗黑と化して行き、遂には綾目もわぬ眞夜半の如くになるであらう。その時は、神の民にとつて慟哭すべき夜、眞理の爲に責を受くる夜である。しかし乍ら斯る暗夜より聖光は輝き出づるのである。

神は光をして『暗より照り出で』（コリント後書四ノ六）しめ給ふお方である。『地は定形なく曠空しくして黑暗淵の面にあり、神の靈水の面を覆』へる時『神光あれと言ひ給ひければ光ありき』（サウゼイ記一ノ二、三）と同樣

靈的暗黑の只中にありて『光あれ』と仰せになる、神の民に對し『起きよ、ひかりを發て、なんぢの光きたりヱホバの榮光なんぢの上に照り出でたればなり』（イザヤ書六〇ノ一）と仰せ給ふのである。

然る時『視よ』聖書にある如く『くらきは地をおほひ闇はもろ〳〵の民をおほはん、されどなんぢの上にはヱホバ照り出で給ひて、その榮光なんぢの上に顯る』（イザヤ書六〇ノ二）にいたるのである。

神に對する誤謬てふ暗黑が此の世を掩てゐる。人類は神の御品性に關する知識を失ひ、ために神は誤解・誤表され給うてゐる。斯る時しも神よりの使命――感化と救濟能力を發揮する――が宣べ傳へられなければならない。神の御品性は明かにせられ、其の御榮光――慈悲と憐憫と眞實との光――が、此の暗き世界に照り輝かなければならない。

この事は豫言者イザヤによつて述べられてゐるところである。『よき音信をシオンにつたふる者よ、なんぢ高山にのぼれ、嘉き音信をエルサレムにつたふる者よ、なんぢ强く聲を擧げよ、聲を揚げて懼るゝ勿れ、ユダのもろ〳〵の邑につげよ、なんぢの神きたりたまへりと、みよ主ヱホバ能力をもちて來り給はん、その臂は統治めたまはん、賞賜はその手にあり、はたらきの價はその前にあり』（イザヤ書四〇ノ九、一〇）と。

新郎の來るを待ちのぞむものは、人々に向つて『汝らの神を視よ』と叫ぶべきである。愛憐の最後の光、卽ち世に傳ふべき神の憐憫の最終使命は、神の御品性卽ち愛より發する啓示に他ならない。此の意味に於て神の子達も、彼の御榮光を反射すること、己が生涯又品性を通し、彼等のために神の爲し給へる御恩寵の何たるかを啓さなければならない。

義の太陽の光は、善き業――眞の言葉、聖き行爲によつて照り出づるべきものである。

父の榮光の輝きに在すキリストは、光として世に臨り給うた。彼は神を人類に表示せんがために現れ給うたが、彼に就て『これは神が聖靈と能力とを注ぎ給ひしナザレのイエスのことにして、彼は徧くめぐりて善きことをおこなひ給へり』（シトギヤウ傳一〇ノ三八）と記されてある。ナザレの會堂に於て彼は仰せ給うた。『主の御靈われに在すこれ我に油を注ぎて貧しき者に福音を宣べしめ、我を遣して囚人に赦を得ることゝ、盲人に見ゆることを告げしめ、壓へらるゝものを放ちて自由を與へしめ、主の喜ばしき年を宣べ傳へしめ給ふなり』（ルカ傳四ノ一八、一九）と。

これこそ彼が弟子達に命じ行はしめ給ふ業である。彼は仰せ給ふ、『汝らは世の光なり』『斯の如く汝らの光を人の前にかゞやかせ、これ人の汝らが善き行爲を見て、天にいます汝らの父を崇めんためなり』（マタイ傳五ノ一四、一六）と。この事に就いては豫言者イザヤも次の如く述べてゐる。『また飢ゑたる者になんぢのパンを分ち與へ、さらへる貧民をなんぢの家に入れ、裸なるものを見て之に衣せおのが骨肉に身をかくさゞるなどの事にあらずや、しかるときは汝の光曉の如くにあらはれいで、汝すみやかに癒さるゝことを得、なんぢの義はなんぢの前にゆき、ヱホバの榮光なんぢの軍後となるべし』（イザヤ書五八ノ七、八）と。

斯樣にして靈的暗黑の只中に、教會を通し神の御榮光を現し、失望せる者を勵まし、悲しむ者を慰むべきである。

我々の周圍には世の風波にもまれ、歎き悲しむもの、困窮缺乏せるものが多い。斯る困苦と悲慘とを輕減・救濟することが我らの爲すべき分である。此の種の實際行爲は說教する以上に効果がある。飢ゑたるものに食を與へ、裸なるものに衣せ、家なきものに宿を與へねばならない。否我々にはこれ以上のことが命ぜられてゐる。凡そ內心の欲求はキリストの愛のみが之を滿すことができるのである。キリストが心中に宿り給ふ時心はおのづと神よりの同情に溢

れ、燃ゆる如きキリストの愛の躍動を禁じ得なくなるのである。

神は困窮せるものに己が所有を與ふるのみならず、朗かな顏容、希望に溢れた言葉、親切な握手などをも與ふることを求め給ふ。キリストは病者を癒し給ふに當つて、聖手を彼らの上に按き給うたが、同じく我等の許に扶けを求むるものに對しても親しき接觸が必要である。

世の中には失望落膽してゐるものが多い。彼等を明るみに連れ歸れ。勇氣を失つてゐるものが多い。その心を引立たせる言葉を語れ。彼等の爲に祈れ。又靈の糧に飢ゑてゐるものもある。神の聖言を讀み聞かせよ。地上の鎭痛劑の屆かない、醫者の癒し得ない靈的疾患に惱んでゐるものが多くあるのである。彼らのために祈り、イエスの許へ携へ來れ。イエスてふ眞の名醫の在すことを紹介せよ。

光は祝福である。一向に感謝の念なき罪に汚れたるこの世に惜しみなく其財寶を傾注する一の普遍的祝福である。義の太陽より發する光もこれと同じである。地上は悉く罪てふ暗黑に掩はれてゐる。世人の悲しみと苦しみに對しては神の愛を知らしむることによつて之を明るくしなければならない。天の御座より發する光は、人類階級の如何を問はず、凡ての者の上に洩れなく照り渡らしめねばならない。

希望と憐憫とに充ちた使命が、全世界に宣べ傳へられなければならない。誰でも欲みさへすれば神の御まへに出でその聖能力に倚り縋り和ぎを求め、之が與へられる。異邦の民をも倚この上暗黑中に閉じ込めておくべきでない。義の太陽の發する光耀の前には幽暗は消え失せるべきである。すでに冥府の力は破られる。

ではあるが誰も自分の受けないものを他に强つることはできない。神の聖事業には人間の創案によるものは何一つとして

してない。自己的努力でもつて神のために光を放つことはできない。恰も天使によつて金の油が金の管を通つて聖所の燈臺の燈盞に注がれ、煌々たる不斷の光輝を放つ如く、絕えず人類に注がるゝ神の愛が彼をしてその光を他に輝かすものたらしむるのである。信仰によつて神と結合するものゝ心に、愛てふ金の油が溢るゝまでに注がれ、再び善行となつて照り出で、眞心よりの奉仕となつて現れるのである。

無制限なる聖靈の賜物の中には、凡ゆる天上の富源が含まつてゐる。斯る豐なる恩惠が地上人類の上に降り注がれないのは、神が故意に阻み給うてゐるからではない。心より之を迎へ入れるならば、一人洩れなく聖靈に滿たさるゝことができるのである。

猶キリストの測るべからざる富卽ち豐けき恩惠を世に與ふるため、神によつて用ひらるゝ器となることは、誰しもにとつて大なる特權である。今日キリストは聖靈と品性とを表示するものを如何に熱求し給うてゐることであらう。又今日世は人類を通し救主の御心の顯さるゝことを如何に必要としてゐることであらう。全天は人の心に歡びとなり祝福となるべき聖き油の斟ぐ管となり得るものを切に待ち望んでゐるのである。

教會をして一箇の更新變化されし團體となり、世に光を輝かし、イムマヌエルの榮の所有者たらしめんが爲、キリストは既に凡ゆる準備を爲し給うてゐるのである。凡ゆる基督者を光明と平和の靈氣によつて包むこと、之が彼の望み給ふところである。主は御自身の有し給ふ歡びを我らの生活の中に顯すことを欲し給ふ。而して聖靈の內住し給ふ證據は、天來の愛が溢れ出づることにある。神の充ち足れる德は、聖められたる器を通して現れ、之によつて他のものを稗益するにいたるのである。

義の太陽には『その翼に醫す能力』（マラキ書四ノ二）がある。その如くキリストの弟子たるものによつても生命・勇氣・希望及び眞の癒しの能力が發揮されねばならない。

キリストの宗教は、單なる罪の赦以上のものである。卽ち我等の罪を除くとともに、その空所を聖靈による恩惠でもつて充たす事である。それは聖なる光耀、神による歡喜であると云ふことができる。己を空しうし、幸あるキリストの內住を得てゐる心とも云ふことができる。キリストが人の心を支配し給ふとき、そこには純潔と罪よりの解放とが實在する。福音による充足と完全とが其の人の生活の中に實現する。故に救主を信受することは完き平和・完き愛・完き確證の溢れに他ならない。我らの生活に顯るゝキリストの品性は、疑ひもなく神が救主として聖子を世に遣し給ひし事を證するものである。

キリストはその僕等に輝くやうに勵めとは命じ給はない。汝の光を輝かせと仰せ給ふ。我等が神の御恩惠に浴する時は、光はおのづと我等の中にあるのである。障碍となつてゐるものを除くならば、自づと主の御榮光は現れて來るのである。卽ち光耀は照り出でて、暗をつんざき之を消散せしむるにいたるのである。周圍に光を輝かさゞらんとしても輝かさずにはゐられなくなるのである。

人性を通して輝く主の御榮光の顯現は、救主を宿す凡てのものゝ衷に燦爛たる美しき宮の內殿が認め得らるゝ程に人々の許に天を近づくるものである。內住のキリストより放たるゝ榮光には、思はず人々は捕へられるのであつて、讃美と感謝に充たされつゝ多くの靈魂は神に導かれ、榮を神に歸することができるのである。

『起きよ、光を發て、なんぢの光きたり、ヱホバの榮光なんぢの上に照り出でたればなり』（イザヤ書六〇ノ一）

と、新郎を迎へに出づるものには斯る使命が授けられてゐるのである。權能と大なる榮光とを持ちてキリストは來り給ふ。彼は己が榮と父の榮光とを以て來り給ふ。千萬の聖天使と偕に來り給ふのである。世は暗に閉されてゐるが、聖徒の住居には光がある。彼等聖徒達は再臨に面した時にも最初の光耀を捉ふることができるのである。光輝赫々たる中に曛主に在すキリストは、彼に仕ふる凡てのものによつて崇敬讃美され給ふのである。この時惡者は彼の聖前より逃げ匿れるが、主を信ずるものは悅び躍るのである。家長ヨブは、キリスト再臨を前途に眺め『我みづから彼を見たてまつらん、我が目かれを見んに識らぬものゝ如くならじ』（ヨブ記一九ノ二七）と云つた。忠信なる基督者にとつて彼は日毎の伴侶であり敬愛する友であつたと云ひ得べく、彼等は極めて緊密なる接觸を保ちつゝ、斷えず神との交りを續け、日日を過して來た。彼等の上にヱホバの榮光は顯れ、主イエスの聖顏に現れたる神の榮光を知るの光は彼等の衷に反映してゐる。今や彼等は天がその稜威をもて來り給ふところの王なる主の曇りなき光明と榮光の放射を浴びて歡喜するのである。彼等の心中には天を宿してゐたから天と交る準備ができてゐる。

彼等は赫々たる義の太陽の光輝に包まれ乍ら、頭を擧げ、曛の日の近づける事實に歡喜しつゝ『これはわれらの神なり、われら俟ち望めり、彼われらを救ひたまはん』（イザヤ書二五ノ九）と聲をあげつゝ新郎にまみゆるために進み出でるのである。

『われ大なる群衆の聲、おほくの水の音のごとく、烈しき雷霆の聲の如きものを聞けり、云はく「ハレルヤ、全能の主、われらの神は統治すなり、我ら喜び樂しみて之に榮光を歸し奉らん。そは羔羊の婚姻の期いたり、旣にその新婦みづから準備したればなり」……御使また我に言ふ、「なんぢ書き記せ、羔羊の婚姻の宴席に招かれたる者は幸福

なり」と。』『羔は諸の主の主、王の王、これと偕にある者はみな召され選ばれたる忠信の者なるに因』（モクシロク一九ノ六―九、一七ノ一四）と。

昭和十五年三月五日　印刷
昭和十五年三月十日　發行

□自然と宗教□
定價　金五圓

原著者　イー・ジー・ホワイト
飜譯者　極東福音社編輯部
發行者　東京市杉並區天沼一丁目一七一番地　佐々木盛吉
印刷者　東京市杉並區天沼一丁目一七一番地　加藤武夫
印刷所　東京市杉並區天沼一丁目一七一番地　極東福音社印刷部

發行所　東京市杉並區天沼一丁目一七一
極東福音社
振替口座・東京貳壱參貳七番
電話　荻窪二〇五一番

401
144

終